

《短歌》

— 全体講評 —

今回の応募作には十代から九十代以上の方まで、多彩な作品が寄せられました。

近代短歌の伝統でもある写生的な叙景歌はやや少ない印象がりましたが、丹念な読み応えのある作品に出会えたのを歓びとします。また、ふるさとや亡き人、想い出をふり返る作品に佳作がありました。回想詠は一首の内に時間の流れを含み、豊かな情感を紡ぎ出します。さらに生活を明るいつつうたう作品にも特色があり、現代短歌の一面をあらわしています。

最後に、若い人たちの受験や学生生活、学外活動に若い力で打ち込む姿など、フレッシュな作品群に惹きつけられたことを申し上げます。その作品の清々しさはかけがえのないもので、文学の源泉をなしていると思いました。

山田 吉郎

【最優秀賞】

今度いつと尋ねる母に又来ると別れしままの永き歲月

加藤 和子

— 講評 —

離れ住む母とひとときを過ぎしての別れ際、「今度いつ」と尋ねた母の言葉が切ない。下の句の「別れしまま」という感慨が読む者の胸を打つ一首。

【優秀賞】

父母は亡く帰る家なきふる里や正月なればやはり恋しき

相川 和子

— 講評 —

ふるさとの父母も亡くなり、生家もなくなった人の思郷の想いがさりげなく吐露されている。「正月なればやはり恋しき」に生活感がにじみ出ている。

【優秀賞】

旅立ちの花を貰った翌日は心の穴を花瓶がわりに

詩音

— 講評 —

新たな人生の旅立ちにあたって花を贈られたのであろう。そこには希望と同時に「心の穴」もあるという。青春期のまぶしく繊細な心情を詠んで印象的。

【優秀賞】

花の有る道を選びて散歩する今日はソヨゴの赤い実光る

高橋 スミ

— 講評 —

端正で美しい写生詠。「花の有る道を選びて」にしつとりとした落ち着きのある心境がうかがわれる。下の句の「赤い実」が鮮やかな映像を結んでいる。

【優秀賞】

三度目の試験を受けに行く大学今度こそはと風吹き飛ばす

長谷川 杏莉

— 講評 —

受験に正面から向き合う歌。下の句の「今度こそはと風吹き飛ばす」に若々しい力が感じられ、まっすぐにうたいきったところに清々しさが流露する。

【優秀賞】

あの頃とおんなじ笑顔すこしだけ大人びている君の遺影は

二万 久文

— 講評 —

しみじみとした追悼歌。「あの頃」の君の笑顔を回想し、今見つめている君の遺影が「少しだけ大人びている」と感じとる繊細さが、読者の胸に沁みる。

俳句

― 全体講評 ―

コロナは五類になりましたが、世界には二つの戦争が今も続いております。日本では一月元旦の能登の地震。二日にその地に物資を運ぶ海保機が日航機と羽田で衝突炎上しました。俳句も戦争と地震とを詠む事から始まりました。応募に直接地震や戦争を詠んだ句は少々でしたが、このような深刻で哀しい命の晒された環境の影響は作者の詩の背後に滲んでいるように感じられます。今年度は七十二名の方々の応募を戴きました。私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」と考えております。今回もたくさん良い句がございましたが、単なる報告ではなく、飛躍の効いた詩的個性のかがやくものの中から秀句を選びました。来年もまた応募下さいますよう宜しくお願い致します。

梶原 美邦

【最優秀賞】

側転の少女の回す大花野

堀場 美知子

― 講評 ―

側転は脚を開いたまま両手を横につき倒立して一回転し、立つ体操。少女は余りの美しい花野に側転し、貴女を一回転させましたと、はにかみの挨拶をした。

【優秀賞】

慣れて来しホームの暮らし水温む

安齋 行夫

― 講評 ―

老後は持ち家やマンションの一室を借りて住むのも困難。そんな時、老人ホームが最適である。「水温む」がホームでの暮らしを象徴的に語っている。

【優秀賞】

線香の確かな香り秋拾

近藤 昭子

― 講評 ―

拾は裏地のある着物。秋冷のある日の墓参に線香の煙の染みを確り拾が留めていた。家に帰って着替える時、その線香の香に亡き人との思いの深さを感じた。

【優秀賞】

夢うつつ気は南方にかじけ鳥

坂野 光山

― 講評 ―

かじけ鳥のかじけはやつれる・かじかむ等の意。かじけ鳥は冬鳥。漂鳥が留鳥になったのだらう。寝ても覚めても故郷を思う、生気のない姿に見えてくる。

【優秀賞】

燃え上がる枯葉の中のラブレター

竹岡 広仁

— 講評 —

嘗て思いもかけない恋文をもらい、大切に保存してきたが、今となつてはと思い、焚火の際、枯葉の底に秘め、火を点けた。文は昔の想いの炎を上げた。

【優秀賞】

丸くなりし兄と語らふ十三夜

中村 みき子

— 講評 —

兄さんは「十三夜」のようだねと言うと、はにかんだ。昔は父に似て頑固であつたが、今はその気骨も、少々欠けの残っている月の様に穏やかになった。

【優秀賞】

ややこしい話ほぐれる春炬燵

竹岡 美恵

— 講評 —

こみいった複雑な話をしていると、出口のないところまできた。沈黙がしばらく続く。炬燵が段々温かな気持ちと呼び起こす。解決の言葉が一人が発した。

【優秀賞】

口中に野の匂ひ満つ蓬餅

出来 典子

— 講評 —

草餅を作ろうと野に摘みに行く。草はそれぞれの香を放っている。野草の中でも蓬はゆかしい。摘んで家に帰り、蓬餅を作り、野の香を思い切り頬張ってみた。

《川柳》

— 全体講評 —

二〇二四年は心痛む出来事で始まりました。

川柳は時代をくつきりと映す文芸です。今年度は震災・戦争・政治に関する句も寄せられました。無事を祈るばかりの日々が今も続いております。

一方、コロナ対策緩和を受け、のびのびとした気風の句が寄せられ、時代の局面が表れました。身の出来事からご自身の心を詠むことが、句の奥行きにつながります。じっくりとご自身を見つめ直す作品も多くありました。

さて、五七五のリズムある音の数は、作句する人にも、その句を受けとめる人の心にもスツキリとしみわたっていきます。作句した作品を、一度推敲して定型に整えてみることをご提案いたします。心に響くリズムは、句に説得力を与えます。

おおらかに、心や時代を定型で詠む。川柳という詩の器が、皆さまの表現を待っています。

やまぐち 珠美

【最優秀賞】

今朝のパン戦火の命紡ぐ糸

はな

— 講評 —

世界各地で戦火が収まる気配がありません。作者の朝食にパン。そのパンは、戦火に逃げ惑う人々には命をつなぐもの。下五「紡ぐ糸」に一縷の望み。

【優秀賞】

退化する脳の歯止めへ不便益

安藤 美佐子

— 講評 —

「不便益」とは、手間のかかることに価値を見出す考え方。便利な世の中を斜めに見据えたところに、句の深みが出ました。脳の活性化に期待大です。

【優秀賞】

半世紀つづく絆に妻のチョコ

鈴木 雄三

— 講評 —

金婚式を迎えたお二人の日々を、バレンタインのチョコレートで描きました。ありがたうを言い交すたび、お二人の絆がより強くなっていくことでしょう。

【優秀賞】

腹空かし彷徨っていただけの熊

堀場 美知子

— 講評 —

民家や、山中の人を襲う熊が問題になりました。作者の視点は一層に深いところにあります。熊は人の自然破壊ゆえに「彷徨つ」ただのだと。「だけ」は寸鉄。

【優秀賞】

雨ふるな空も心もぬれるから

みえ

― 講評 ―

叫びともとれる上五は、実は深い願いの「ふるな」です。作者の空は大切な人の空にも、被災地や戦地の空にも続いています。心を掬いあげる一句です。

【優秀賞】

ハレの日の余韻にひたる夕間暮れ

八木 せいじ

― 講評 ―

特別な日の充足感を、一枚の写真のように描きました。光あふれる情景にいる作者へ、一日の幕引きの「夕間暮れ」。光と陰の織りなす人生の舞台。